

私・日本の書紀

中村 豊 (会員番号 No. 8)

はじめに

今年には皇位継承があり、元号が「平成」から「令和」に改められた。元号（年号）は歴史上の年を数えるため、日本の権力を握る者が天皇の交代または治世方針の改正の際に改元してきた。現在は元号法により「一世一元の制」となっている。日本の元号はAD645年蘇我氏討滅を機に「大化元年」と定めたのが最初とされる。

古代日本の歴史は「古事記」や「日本書紀」に詳細が記されている。しかし、「記・紀」には天地開闢から始まって天孫降臨に至り、日本の成立が叙述されているが、神話は非科学的で、偽歴史的な誇張や朝廷賛美の記述が多く、信じられない事が多い。

そのため、過去から現在まで多くの研究者が多方面の検証から様々な論考、論文が出されている。日本列島にヒトが進出し、日本がどのように成立したか、私的に歴史を探訪する事は興味深い。

日本人はどこから来たのか？

日本列島にヒトが現れるようになったのは、日本列島最古の石器（砂原遺跡・12万年前）を遺した旧人と考えられている。日本列島に現生人類が現れるのは4~3.5万年前と考えられている。この事は日本人固有のY染色体ハプログループD1bの起源年代とおおむね一致する。

この頃の人類は最後の氷河期（約1万2000年~1万3000年）までに樺太や対馬の陸橋から渡り住んだと考えられている。特に氷河期には海面が低下して、大陸と陸続きになることがあった。例えば、間宮海峡は浅いため、外満州と樺太と北海道はしばしば陸橋で連絡があった。

津軽や対馬両海峡は130-140mと深いため、陸橋になった時期は限られ、津軽海峡は鮮新世末まで開き、対馬海峡は日本海塊開裂時代には開いていたが、その後の中新世末から鮮新世には閉じたと考えられている。また、南西諸島ではトカラ海峡（鹿児島以南）、ケラマ海峡（沖縄島以南）ともに1000mを超す水深であり、陸橋になった可能性はまず考えられない。

しかし、航海技術を持った海洋系の民族が渡来した可能性はある。これらのルートから様々な人種が原日本人を構成し、日本各地域に縄文文化を花開かせた。九州では大集落もみられ、舟作りの工具（世界最古）や燻製施設と大量の炉、独自の



火焰型縄文土器 (国宝)

の貝殻紋の土器など、高度な海洋民族が住んだことを推定できる。

「国」(階層化社会)の成立

縄文時代の日本人は背が低く、いかつい顔立ちで日本列島ほぼ全域に渡って住み着いていた。日本全体の人口は最大で26万人と推察されている。しかし、鬼界カルデラの破局的噴火が約7,300年前に生じた。噴煙柱は高度3万メートルまで達し、それが崩壊した火砕流は、海面を走り、種子島、屋久島などを焼き尽くし、100km離れた薩摩半島にまで達した。噴火の火山灰は数mも降り積もり、九州や四国の縄文人を死滅させた。

この噴火の影響と縄文中期の温暖気候は東日本以北で縄文文化が発達した理由の一つだろう。

その後、1000年ほど九州は無人の地となり、新たな人は朝鮮半島、中国大陸からの渡来人であった。この事は遺跡の骨の特徴から、それまでの日本列島では見られない、長身で、面長な顔付きの朝鮮半島や中国大陸の古代人に似た人たちからも分かる。



鬼界カルデラ火山灰の堆積

この時代以降の縄文後期から晩期末にかけての玄界灘沿岸・島原半島・中九州ではコメ・オオムギ・エンバク・アズキ・リョクトウなどの食物が栽培された形跡があり、栽培型植物がもたらされたのではないかと考えられる。

縄文時代は採集・狩猟・漁撈活動を組み合わせた生活基盤にあり、食物が尽きると集落全体を移動させていた。食料を栽培により得ることで生活に大きな変革があった。安定的に食料が得られ、集落の定着が起こった。

しかし、人口が増加することにより、新たに耕地を拡大するか、分村して新たな耕地を開発する必要が出てきた。さらに、畿内や瀬戸内は近隣の小集団との間が照葉樹林の森で緩衝されていたのに対して、北九州では玄海灘沿岸地域の沖積平野は少なく、「土地争い」という新たな紛争が発生した。これらの事から慢性的な食料不足、人口増による精神的不安、水争い、土地争い、不慮の災害や凶作により食料の略奪が起こった。さらには海を渡って来る民族による新しい稲作技術や戦争に関する技術や情報により防御的な環濠集落が構築され、北九州では他地域に比べて戦争を生む条件が整った。この事は首を切られた遺骨や首だけの埋葬列や頭を割られ、全身に傷を受けた人骨が集中して出土することで証明されている。加えて、土木工事を伴う共同作業中心の水田稲作の開始と併せて、首長の統率力が必要になる。首長に求められる能力は知識や経験だけではなく、部族の一体感を統率し、外の共同体との利権を巡る調整力、指導力、強制力を必要とし、首長の能力

が部族の命運を握ることにも繋がる。このことから階層化社会が始まる。これらの階層化の発生は共同体同志の争いの結果、勝者の首長の力をより高め、敗者は隷属するという関係を作り出した。これが階層化をより進化させ、共同体の統合に繋がり、また、伝聞から中国大陆の国家体制の大きな影響を受けて「国」が発生した。古事記にある神話「海彦・山彦」や「浦島伝説」などはこの時代のことを伝えているのではないかと。

中国「古史書」による日本

この時代から数百年の日本の実情は中国に残る多くの史書に頼らなくてはならない。中国の史書「後漢書」によると、AD57年に「奴国」から漢王朝に朝貢外交をしたというのが、日本列島での最も古い国の存在を示す記録になっている。当時の漢王朝・光武帝は、この使者に「漢委奴国王の金印」(福岡・志賀島で発見)を与えている。これは中国の「冊封」システムに組み込まれ、漢王朝に従属する国の王と正式に承認されたことを意味する。この頃、日本(倭国)には他にも大小多くの国が割拠していた。AD107年にも後漢書「東夷伝」に、日本から朝貢の使者が訪れ、「倭国王帥升」が「生口(奴隷)160人」を献じたと記録されている。「倭」と称される一定の領域があり、「王」とよばれる君主がいたことがわかる。ただし、その日本での位置や政治組織の詳細は不明である。その後、大陸ではAD220年に漢帝国が滅び、魏・蜀・呉の戦国時代となる。朝鮮半島では楽浪郡ならびに帯方郡を支配していた公孫氏が魏に滅ぼされ、魏の支配地になった。



漢委奴国王金印 (国宝)

AD238年魏国志「魏志倭人伝」に「邪馬台国」の女王「卑弥呼」から朝貢の使者「難升米」が送られ、生口10人を献じたと記されている。魏は使者に「親魏倭王の金印」を授与し、他に銅鏡100枚、白絹や刀、真珠などを返礼として与えている。

この金印は未発見で、返却されたとの説もある。この間、100年以上の開きがあり、中国の複数の史書に記述が見られる「倭国大乱」という戦乱の時期にあたり、朝貢外交の使者が送られていなかったと考えられる。倭国大乱は2世紀後半頃の高地性集落（山頂等に営まれた城塞的な集落）遺跡などから北九州から畿内、山陰、瀬戸内海沿岸にかけての広範囲な内乱だった。卑弥呼を「共立」して倭の女王とし、それによって争乱は収まり、30国ほどの小国連合が生まれたと記している。「邪馬台国」が九州か、畿内かに位置したかは未だ結論が出ていない。その後の弥生時代には銅の生産が行われ、銅鐸文化が起こっている。銅鐸は音を奏でる祭祀用で、畿内と東海の二様式があり、二世紀に忽然と消え、それは銅鏡に変わる。また、小国相互の政治的結合が必ずしも強固なものではなかったことは、「後漢書」の「倭国大いに乱れ、更相攻伐して歴年主なし」の記述があることから明らかである。



銅鐸（重文） 三角縁同向式神獸鏡（重文）

この後、中国、朝鮮の国々で情勢が混乱する時代を迎える。倭国も東に五十五国、西に六十五国と現されるように国々が連立している。宋の「倭国伝」には「讚・珍・濟・興・武」の倭の五王と外交関係を結んだと記されている。時代区分としては弥生時代から古墳時代に入っている。「倭の五王・讚」がAD399年高句麗と対立する百済と同盟を結ぶ。AD421年北魏と対立する宋に朝貢している。また、「倭の五王・珍」が高句麗との対立から軍事指揮権と国内融和のため複数の官職授与を要求したと記されている。AD475年高句麗が百済を攻めた時、「倭の五王・武（雄略）」は鉄資

源を朝鮮・新羅に求め、武具・馬具の軍事改革を進め、宋に対して「大王」と名乗り、「安東將軍」を求めている。「三國史記」には「武」の死後、大乱が記され、古墳時代に王権の交代があったとする説がある。倭国の東に位置した大和王権は複数の王国が連立する形で成立した、一種の連合国家だったと考えられる。新羅から出雲へ多くの渡来人が来て、出雲を中心とした日本海沿岸に出雲王国が起こり、鉄製の武器を使用し、その勢力は畿内や北陸まで拡張した。やがて大和や北部九州に対抗した「出雲・吉備連合」勢力が存在した。童話として残る「因幡の白兔」や「桃太郎の鬼征伐」はこの事を著しているのかもしれない。

最初は大和と出雲の二大王国が連立したが、出雲王国は戦争に敗れて、大和王権に吸収された。これは「大国主命の国譲り」を現わしているのではないだろうか。

AD600年「隋書」の中に、以前は「倭人」と名乗る使者が訪れていたが、今回は「日の本」と名乗る使者が来た、これは明らかに以前の「倭人」を併合した者だと書かれている。

大和王権による「日本」の成立

大和王権は古墳時代の4世紀初めには成立していた。初代神武天皇から十数代の初期天皇の実在性については十分な証拠はない。第21代雄略天皇は古墳から名入りの鉄剣が複数出ているので実在が証明されている。

この頃の大和王権には権力を維持する「氏族制度」が編成され、全国の豪族を支配していた。これは中国の制度を模倣したものである。例えば、「物部氏」は軍事や警察、神事を司る「部民」で、「蘇我氏」、「中臣氏」は豪族が所有する「部民」である。7世紀に大陸から仏教が伝来すると、神道を司る物部氏と仏教を信じる蘇我氏との間で宗教戦争が勃発した。その結果、蘇我氏が勝利して、仏教は広く国に受け入れられた。また、蘇我氏は大和王国の実権を独占する地位に就く。蘇我氏と聖徳太子は、仏教を広めて、天皇の政治的権威を高めると共に、冠位十二階や十七条憲法を定め、「遣隋使」を派遣し、日本を中国風の法治国家へと大改造した。この後の聖徳太子一族については蘇我氏により滅亡したのか、謎である。

「乙巳の変」とAD645年「大化の改新」が起こった。これらは中大兄皇子と中臣鎌足が蘇我氏を攻め滅ぼした宮廷内の政権争いである。AD663年、中大兄皇子は唐と新羅の連合軍に攻め立てられる半島の同盟国、百済を助けるため、大軍を派兵した。しかし、壊滅的大敗を喫し、百済と任那は新羅に統一平定された。

唐と新羅の連合軍が攻めてくる可能性は極めて高く、天智天皇となった中大兄皇子は、百済からの亡命者を大量に受け入れ、結果的に唐と新羅に抗争が起こり、大陸からの侵攻はなかった。北九州沿岸に朝鮮式の城塞（水城や大野城）を築かせた。この時代に九州に王国が存続しているかは明らかでないが、AD720年に「隼人の乱」が起こり、大和政権に平定された。

しかし、天智天皇の政治的威信は落ち、近江宮で没すると、弟の大海人皇子と子の大友皇子の間で政権争いの戦乱「壬申の乱」が起こった。この戦いは、大海人皇子の勝利に終わり、即位して天武天皇となった。天武天皇は中央集権化を推し進め、中国の政体をモデルにして「大宝律令」を制定し、国名「日本」を明記して律令国家を完成させた。

外交的には、新羅や唐と和睦した。また、日本初の通貨「富本銭」を作り、物納や物々交換に変わる制度を発足させた。天武天皇の没後、都は藤原京から平城京に移された。いわゆる奈良時代の幕開けである。この後、皇位継承の都度に遷都するという習慣は無くなった。壬申の乱以降、天皇の血統が一本化されたからであろう。

ただ、平城京では宮廷内抗争が相次いだため、専制君主としての天皇の権威は揺らぎ、藤原氏（中臣、鎌足の子孫）に代表される有力貴族の台頭を許すことになった。

聖武天皇による東大寺や国分寺の建立は、国威高揚の目的のみならず、氏族の利権伸張の目的が隠されていた。また、称徳天皇と怪僧・道鏡の事件も、その根底には藤原氏と橘氏（道鏡の出身氏族）の覇権闘争があった。

おわりに

「日本書紀」の編纂は天武天皇によって作成を命じられた国家事業であるが、皇族や各氏族の歴史上での位置づけを行う、極めて政治的な色彩濃

厚なものである。編集方針の決定や原史料の選択は政治的に権力のある貴族が主導したものと推測されている。

弥生時代から飛鳥時代は未解明の数世紀といわれている。今でも新たに大きな古墳が発見されているが、古代日本の真の歴史を解明するためには九州や出雲、吉備の古墳や遺跡と、世界遺産の登録として話題になっている、「宮内庁」管理の近畿地方の前方後円墳などの古墳群を科学的に歴史的に調査すると日本の歴史を解き明かす多くの事実が見つかるだろう。



大仙陵古墳（大阪府堺市）

また、気候変動により全国で凶作と疫病が流行した奈良時代は、「青によし 奈良の都は 咲く花の 匂うがごとく 今盛りなり（万葉集 3-238）」と謡われるのは都だけで、各地方の一般国民は飢えと病で、厳しい時代であったようだ。

この後の平安時代は戦争の無い期間が長く続いたが、藤原道長が「この世をば わが世と思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば」と謡ったように、長く藤原氏の栄華が続いた。歴史は勝者によって捏造され、真実は隠蔽されるようである。